

令和3年度 指導改善プラン

羽島市立小熊小学校 安藤 由紀

1 児童の実態

(1) 令和2年度全国学力・学習状況調査(羽島市版)の結果から

- ①国語…「事実と意見とを区別して書く」問題(領域:書くこと)の正答率が低い。
- ②算数…示された考えを基に、数の相対的な大きさを用いて、小数の加法を整数の加法に直して処理する方法を記述する問題は、正答率が低い。

(2) 令和2年度 児童の学習状況

3か月の臨時休業があり、指示を正確に聞き取ることができなかつたり、問いかけに反応するまでに時間がかかったりする姿がみられた。また、基礎的・基本的な内容の定着度が低くなり、足し算・引き算に時間がかかったり、板書をノートに書き写すことにとまどったりする児童も見られた。

6月には、全校で「聞き方名人」の取り組みを行った。全校で取り組むことで、「目を見て仲間の話を最後まで聞く」という基本的な学習姿勢が身についた。

算数科の授業を中心に、主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行った。全校で統一した授業の1単位時間の指導過程や板書、ノートづくりを明確にした。

12月に一人1台のiPadが導入されると、児童らは、インターネットを使って調べ学習をしたり、ロイロノートを使って考えをまとめたりすることに意欲的に取り組んだ。ノートに図や文を書くことに苦手意識のあった児童も、ロイロノートには積極的に考えを書いたり、ロイロノートを見せ合って交流したりすることに意欲的に取り組む姿が多くみられた。そのため、3年生以上のクラスではロイロノートを授業に積極的に活用した。

(3) 課題

- ①家庭学習が身につかず、音読・漢字・計算の力が十分に身につけていない児童が多い。
- ②ロイロノートを使った交流活動が、意見発表にとどまり、「仲間の考えを広く知る」だけの活動になってしまう場合が多い。「よりよい考えをつくる」活動や、「仲間の考えをまとめる」活動も行い、深い学びになるようにしたい。
- ③語彙力が低い児童が多く、教科書に出てくるキーワードなどの意味を答えられない児童もいるため、わかりやすい言葉で言い換えるなどの支援が必要である。語彙力を高めれば、学力状況調査で弱さの見られた記述する力も向上すると考えられる。

2 指導改善の方向

大きく分けて、3つの視点で指導改善を行う。

(1) 【じまんの授業づくり】

仲間との対話的な学びづくりとしての学習姿勢づくりを行う。信頼し合い、安心して学び合いができる学級づくりを行うと同時に、聞き方名人、話し方名人の取り組みを全校で行い、児童が主体的に対話し、互いに学び合おうとする学習姿勢をつくっていく。

(2) 【できた・わかった・なるほど算数】

算数科を中心に主体的、対話的で深い学びのある授業づくりを行う。

児童が主体的に取り組めるICT機器の効果的な使い方や、対話的で深い学びのあり方を研究する。(GIGAスクール構想)

(3) 【全教育活動を通じた児童の読解力の向上】

スキルタイムには、ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字などに加え、音読のテストも行い、基礎の定着が不十分な児童には、昼活動の時間や家庭学習で繰り返し練習するよう働きかける。また、どの授業でも辞書と付箋を使い、わからない言葉があれば、すぐに調べメモする習慣をつける。各教科のキーワードなど大切な言葉を「〇〇はこういう意味です。」と自分や相手にわかる言葉で言い換えて説明できる児童を目指す。

3 実践や取り組み、方途

(1) 【じまんの授業づくり】～仲間との対話的な学びづくり～(聞き方名人・話し方名人の取組み)

4月第1週から、「目を見て最後まで聞く・目を見て話す」ことを中心に指導していく。4月・9月・11月には全校で「聞き方名人・話し方名人」キャンペーンを行う。発達段階や学級の実態に合わせて具体的な目標を決め、取り組み、成果を全校で共有して、自分たちでつくる小熊小の「じまんの授業」にしていく。

(2)【できた・わかった・なるほど算数】～主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～

①既習と比較し、問いが生まれる視点を共有した課題づくり(重点1)「やってみよう」「できそうだ」

「昨日までの学習を生かして」「昨日よりもさらにかしこくなるために」「今日は何を学ぶか」を明確にした課題づくりを行う。→問題文の中の「わかっていること」「きいていること」を明らかにする。→今までと違うことを見つける。→今日は何を学ぶかを定める。

問題文を把握する際に、デジタル教科書や板書をどのように使うと効果的かを研究する。

②結果を予想し、既習の解決方法を想起する見通しづくり

③主体的な個人追究による考えづくり(重点2)→「やってみよう」「できた」

発達段階や単元、学習内容によって、何を使って追究していくと効果的かを研究し、授業改善を行う。

(おはじき、ブロック、ノートのマスや数直線、図、グラフ、ロイロノート等)

④説明し合う目的と方法を明らかにした主体的・対話的交流活動づくり(重点3)→「なるほど」「わかった」

授業内容によって、説明し合う目的を明らかにして交流活動を行うことで、主体的な交流、対話的な交流にする。(自分の考えと似ているところを見つける・自分の考えと違うところを見つける・よりよい方法とその理由を見つける・いろいろな考えの共通点を見つける等)

ロイロノートを使うことで、コロナ感染症予防に配慮しながら主体的に深い交流ができるように、どの場面でのようにロイロノートを使うことが有効かを検証し、授業改善を図る。

⑤発達段階や授業の目的に応じたまとめづくり(重点4)「〇〇とは、…意味です」

キーワードやまとめの言葉の意味が身振りや図、自分の言葉で説明できるようにする。

⑥どんなことを学び、どんなことができるようになったかが分かる構造的な板書づくり

⑦どんなことを学び、どんなことができるようになったかを実感できる振り返りづくり

(3)【全教育活動を通じた児童の読解力の向上】

①国語辞典の活用

児童一人一人が国語辞典を常に携帯し、辞書で調べる習慣をつけて、語彙力をつけ、「〇〇はこういう意味です。」と自分や相手にわかる言葉で言い換えて説明できる児童を目指す。

②家庭学習→スキルタイムの小テスト→昼活動の時間の見届けのサイクルの活用

スキルタイムには、ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字などに加え、音読のテストも行い、基礎の定着が不十分な児童には、昼活動の時間や家庭学習で繰り返し練習するよう働きかける。

音読カードとともに、スキルタイム小テストの合格表を毎日家の人にも見てもらい、家庭学習の励みにする。

③家庭学習グレードアップ週間の活用

保護者に「家庭学習の手引き」を配布し、家庭学習の重要性や方法の啓蒙を行い、協力を求める。

家庭学習グレードアップ週間を年間3回位置づける。家庭学習は、「自分の力を自分で高める場」ととらえられるよう事前指導する。1回目は「学習を始める時刻・環境づくり」2回目は「学習時間」3回目は「学習内容」と視点を提示し、めあてをもって取り組むことで、家庭学習の質が年間を通して少しずつ上がるようにする。

家庭学習グレードアップ週間に合わせて、音読・漢字・計算テストを行い、基礎学力の定着を図る。

④iPadアプリやロイロノートの活用(GIGAスクール構想)

ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字入力等のアプリを活用し、語彙力の向上を図る。授業だけでなく、スキルタイムや昼活動の時間にも活用することで、児童が自分の習熟度に合わせて選択し、進んで取り組んでいけるようにする。

(4)【研究会や研修会による職員研修】

①効果的なICT活用の方法について、研修を続ける。学習用具の一つとして、どのような場面でもどのように使うことが効果的かを検討し実践する。特に、課題づくりや交流活動の場面で、どのような使い方ができるかを検証する。また、デジタル教科書と板書の構成や、ロイロノートとノートの使い分けについても検証していく。(GIGAスクール構想)

②全校研究授業を位置づけ、「自分の学年、学級で」「他教科で」生かせることや改善していくことをはっきりさせ、授業改善に生かす。部研を行い、その成果や課題を職員会や打ち合わせで共有して、指導・改善を行うことを繰り返していく。

(5)【指導部会・職員会における児童の実態交流と成果・課題・手立ての検証・改善】

年間を4ステージに分け、各ステージ毎に成果や課題を振り返り、次のステージの手立てを検証し、授業改善を行う。

4 年間の計画 学校における「指導改善サイクル(PDCA)」

4月	第1ステージ	P：学級経営案立案	P：研推・今年度の方針	P：学校運営協議会
5月		C：HyperQUアンケート実施	D：全国学力学習状況調査6年	
6月		P：研修会 学習内容分析の仕方 学習の流れ 生活や学習との関連	A：課題を明らかにしての授業改善	C：学校生活アンケート①
7月	第2ステージ	A：学級経営案加筆修正	C：単元テスト パフォーマンステスト	C：漢字・計算テスト
8月			P：後期に向けての改善策の検討	
9月			A：改善授業実施	C：学校生活アンケート②
10月	第3ステージ	A：学級経営案加筆修正	C：単元テスト パフォーマンステスト	D・C：学校運営協議会 授業参観
11月		C：自校評価職員会で問題意識の共有	C：漢字・計算テスト	C：学校生活アンケート③
12月			D：授業公開・研究授業	C：保護者アンケート
1月	第4ステージ	A：学級経営案加筆修正	C：単元テスト パフォーマンステスト	C・A：授業参観 学校評価 学校運営協議会
2月		P：次年度学校教育計画立案		
3月				C：学校生活アンケート④

5 成果検証の時期と方途

- 6年学力状況調査・・・5月
- 2～6年NRTテスト・・・5月➡研修会6月・・・学級経営や授業改善に生かす
- 1年CRTテスト・・・2月➡1年間の学力の定着度を知り、スキルタイム、授業改善に生かす
- HyperQU・・・5月 ➡研修会6月・・・学級経営に生かす
- 学校生活アンケートの実施・・・「授業がわかる」と感じている児童の割合を調査・分析・改善
6月・9月・12月・2月に行い、その都度、学級経営案加筆修正、学級経営に生かす
- 部研 全研による研究と成果の検証 6月～9月までに一人1回は行い、授業改善を続ける
- 単元テスト・パフォーマンステストによる理解・定着度の検証・改善
- 指導部会・職員会における児童の実態交流と成果・課題・手立ての検証・改善・・・6月、9月、11月、2月
年間を4ステージに分け、各ステージ毎に成果や課題を振り返り、次のステージの手立てを検証し、授業改善を行う。
- 保護者アンケートの実施・・・12月➡学級経営、学校経営、授業改善、次年度指導計画に生かす
- 自校評価アンケート入力・・・12月中
- 自校評価の改善案の作成、検討（各指導部で）・・・1月初め
指導改善案の回覧・・・1月中旬➡回覧中、さらに意見があれば書き込む➡最終改善案の作成
- 来年度の方針を決める職員会（自校評価最終改善案の確認）